

アスリートのための キャリア・トランジション勉強会

Newsletter No.27

2008年3月27日

第27回

アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会

【目次】

1. 「トランジションの中で見えてきたこと～人生を決めた一言～」
 ゲスト：宮澤 ミシェル氏 _____ 1
2. 第27回 アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会
 アンケート集計結果 _____ 22
 2008年3月27日 勉強会参加者人数 _____ 24
3. 次回勉強会スケジュール _____ 25

第27回 アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会

第 27 回アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会

日時 平成 20 年 3 月 27 日(木) 18:30~20:00

場所 エスポーツミズノ 8F

■テーマ■

「トランジションの中で見えてきたこと～人生を変えた一言～」

■ゲスト■

宮澤 ミシェル氏

サッカー解説者

(重野)宮澤ミシェルさんは、もともと日本の高校を卒業されて、その後国士舘大学を出てサッカー選手になった方です。1993年のJリーグの開幕当時ジェフ市原というチームに在籍をされまして、その後引退をした後、今解説をされているわけですが、当時は日本代表にも選出されたという名選手でした。私も17年ぐらい前からお知り合いになっているんですけども、今日こういう形でお越しいただいて本当に感謝している次第です。どうぞ、よろしくお願いします。

(宮澤) こんばんはです。照れるね。

(田中) うそばかり。照れないでしょう。

(宮澤) 最初からハプニング続きでね、電車で動くとかこういうことになるんだなという。千代田線逆方面に乗って、ぱっと逆方面に来ちゃってね。いい勉強になりますね。いや、僕、いつもそういうことをやるんですけど。

(重野) ありがとうございます。今日は本当にお忙しいところをお越しいただきまして。

(宮澤) 自分で来たくて来させていただきました。

(重野) 初めてそういうことを言われていただいています。

(宮澤) 僕からアプローチして。田中さんの会社が発行されている『エキリーブル』という雑誌を見て、これは面白いねということで。

(田中) ちょっと待ってください。でも、うちの『エキリーブル』を見て、私だとは知らなかったんでしょう？

(宮澤) はい。でも毎回いいことが書いてあるし。自分が講演で使うときとか、ああ、子供たちのこととか書いてくれている、素晴らしいなと思って。田中さんとはお食事の席で 1 回だけ一緒したことがあるんですが、そのときにもお話はしていて。こういう雑誌があるんですよ、なんて言って。それ、うちのだ、みたいなことを言われて。あ、そうなんだ、結び付いたっていう。そういうことなんです、いつも、僕の人生はね。だからよく自分で耳を澄ませないと聞こえてこないことばかりで。俺、次、どこへ進むんだろうという。それを思ったときにここにたどり着いたわけですよ。

だから僕は本当に、今日は僕から出させてもらっていますから、遅れてきても。僕から出させてもらって、自分も何かをここに見つけにきていますので、手優しくお願いします。いつもがんがんじやなくて、何か優しいアドバイスをいただければと思って来ていますけれども。

—中略—

(重野) ミシェルさんはもともとお父さんがフランス人でお母さんが日本人でというような家庭にお育ちになって、サッカー選手になっちゃったわけですがけれども、サッカー選手になろうかなということというのは、実は日本人でサッカー選手になった人よりも、何か違う感覚なんじゃないかとずっと思っているわけですよ。

(宮澤) 僕らは、小さいときは 1 年中サッカーをやるという環境がなくて、シーズン制でやっていました。小学校に、最初の春が陸上大会、夏は水泳、秋は器械体操を教えてくれている先生がいてね。それで冬にサッカーということだけだったんですね。その中で、僕は自分がスポーツが得意だ、スポーツに向いているなということが分かったんだ。かけっこが速かったからね。それで全部やってみようと思って全部やりました、シーズン、フルシーズン。勉強だけはしなかったけど。スポーツはサッカーだけじゃなく全部やった。

やったときに、まず水泳は、僕はちょっと小さいときに盲腸で腹膜炎とかをして病院の先生に止められている自分があって、水が怖くて初めて水に浮けるようになったのが小学校 3 年生で、出遅れた面があったんですね。それで大会で、学校を代表して大会には出るんだけれども、まったくだめという感じで、これはだめだ。やっぱり 1 番になりたいじゃないですか、小さいときって。でも器械体操は結構いいところへいっていた。でも柔軟性も含めて市でチャンピオンにはなれなかった。サッカーをやり始めたら、あれという、何かいい自分がそこにいられるみたいな。好きな自分がね。

(田中) 何がぴんと来ました？

(宮澤) まず足が速かったという。ある程度速かったということがアドバンテージであって、びゅっと走ればいけるみたいなところがあって。それで楽しくて。実は自分が通っていた小学校がその地域でもサッカーが強かったんですね。その地域でと言うとすごく広く感じるけど、ほんの 6 校、7

校の中で1番だったんだね。そこでやっている先輩たちがかっこよく見えたんだよね。それでそこに早く入ろう、早く入ろうと。実はいろいろなスポーツをやりながらもサッカーが一番行っていた自分があるね、今思うと。小学校5年生のときにサッカーだけになったんですけどね。

(重野) そういういろいろな取り組みをすることというのは、お父さん、お母さんはどういう感じだったんでしょうか。

(宮澤) 父親はもちろんフランス人で、僕の父親は音楽家だったんだけど、それもすごくいけている音楽家なのよ。俺は死んでから気が付いたけどね、おやじのことは、本当に。亡くなったらもうぶわっと新聞社が来てさ、もう三輪明宏さんとかあのこと生きていた淡谷のり子さんとか菅原洋一さんとかみんな来た。俺んちのおやじのため？ みたいな。そんな感じだった。ただ、そういうおやじだったから何でもやらせてくれたよ。通知表で、算数が、数学だけが2が付いていても、これはしょうがないと言ってくれるんだから。かっこいいおやじでしょう。母親は気にするよ。何がしょうがないんだよ、みたいな。だめだよ、やらなきゃみたいな。でも父親は、いや、これはしょうがない。俺と一緒に、みたいな。それで、あ、そうなんだと。そういう救いがあった。自由にいけ、みたいな。

そういうことで、おやじとまったくアンバランスな、石橋をたたいて渡るような母親がいて、その間に俺がゆらゆらゆらゆらしながらいる。

小さいときは何人(なにじん)をやっているか分からなかったですね。僕は本当に小さいときはアメリカ人、アメリカ人と言われてね。

(田中) 何人をやっているか分からなかった。

(宮澤) 分からなかった。何人をやっているか分からなかった。いつもみんなにアメリカ人、アメリカ人と呼ばれるし。

(田中) そうか、外国人イコールアメリカ人の時代ですよ。

(宮澤) そうです、あの当時はね。日本にはアメリカ人しか外国人はいなかったですね、そういう時代だった。3つ上に兄貴がいるんだけど、兄貴はずっと泣いていた。毎日、ばかにされたりね。兄貴は別に運動もできる方じゃなかったけれども、小さいとき太っていたから。その後運動に目覚めて頑張って、体育の先生なんてやっているんだけど。でもその兄貴を見ていたから、よくお話をさせてもらうときに言うんだけど、何か、負けちゃいけないというのがあったんだよね、それに。

でも打ちのめされるわけ、外人とか何と言われて。それで家に帰ってきて、「アメリカ人、アメリカ人」と言われるんだと、結局母親にこぼすでしょう、子供はね。そういうとき、母親が気にしないでいいと言ってくれるんならいいけど、母親も何かがあって、「アメリカ人じゃない、あんたはフランス人」とか言われると、僕も「ええ？」とか言って。だって分からなかった。それでいつも戦っているしかなくて。いやいや、本当なんだよ。

(田中) 分かる。何でかという、私の子供も、だんながフランス人なものですから。8歳の息

子と 5 歳の娘が、最近お風呂で、何人を選ぶのか悩んでおります。なので、その話、母親側が日本人だと、僕は何人なんだと聞かれると、いや、フランス人でしょうと言っちゃうんですよね。でも日本人なんですよ。だけどそのときの答えはすごく難しい。葛藤しているのは見ていて分かる。こっちも葛藤する。正しい答えがないから。

（宮澤）でも正しい。そうなんですよ。そんなものはどうでもいいんだけど、でも子供は傷つきのよ。子供の頃って、友達に自分の家に遊びに来てほしいじゃないですか、自分ばかり行っていないでね。それで何とか友達を 4~5 人連れてこようとすると、音楽家だから毎日会社に勤めているわけじゃないから、家にいるときはいるんだ、おやじが。そうすると、ぼんと青い目のおやじがみんなの前にヘイなんて言って出てくるでしょう。ハロー、元気？なんて言って。するとみんながうわーみたいに関心してくるわけ。そういうことがいっぱいあるわけよ。

それで、あのころは握手の文化とかもないでしょう。向こうはいきなりこうやって握手なんかするでしょう。日本に握手の文化なんて入ってきたのは、まだ 15 年ぐらい前のことですよ。それに向こうにはハグの文化があるでしょう。それをやられちゃうと、もうその時点で子供はもうどん引きですよ。それでおやじは、外からサンダル履いたまま、平気で家の中に入っていつちゃうでしょう。友達が着て、お邪魔しますなんて言って、靴を脱ごうと思ったら、え、おやじ、そのまま入っていつちゃうている、みたいな。どういう家なんだ、みたいな。それはやっぱり感じましたね。あ、俺、違うなと。

ここで笑ってしゃべっているけど、10 代、7、8、9、10 歳とかそのときだよ。大変でしょう、この文化の違い。トイレも困ったしね。トイレ、和式を見たときは、幼稚園で俺、全部脱いだものね。幼稚園のあの中に入って、どうしていいか分からなくて。それで外から、何やっているんだ、お前って。ミシェル、何かおかしくなっちゃったみたい、って。取りあえず掛けて、こうやってやるんだ、みたいな。そうでしたよ。それは本当にありましたよ。だから本当に日本人としておふくろはやってたんだけれども、家の中はやっぱり外国の文化だったね、今思うとね。

おやじは一切日本のものを食べないし、ご飯も食べない。おふくろは朝起きれば全部昼飯の用意だよ。朝のもう 7 時ぐらいから昼飯の用意。向こうは朝は単純だから。新聞を読みながら、そんなカッコいいものじゃないけど、カフェオレみたいなのとフランスパンで食べて。俺らもそれを見てがががそれで食べてさ、朝からフランスパンの間にバターを塗って。

僕はそういう家に育ちました。だからサッカーを応援してくれるおやじがいて、おふくろがいて。おふくろはおやじに連れられて見に来ていたんだらうけれども。

やっぱりその熱意と自分がやりたいということで中学校へ向うんですけどね。中学生で部活動の先生に恵まれず。美術の先生が監督だった。だからどうしようかというところで、その 2 年は非常に苦しんだね。だから自分でやっていたな。

（重野）でも非常に多くのサッカー選手は、私なんかもそうですけれども、そんな状況でも消耗していなかったんです、全然。

（宮澤） そうだな、消耗はないね。

（重野） すごく低年齢化していると思うんですけど。小中学校でもものすごくやってしまうと、そこ

でちょっと疲れてしまったり。そういうのではなかったんですか。

（宮澤） やっぱり好きでやらせておいてほしいな。勉強だとか何とか確かに大切なことだけれども、それを親がやらせるじゃないですか、親が頑張ってるね。おやじみたいになってほしくないとか、おやじみたいになってほしいということでやらせていく。そうすると、子供の時間というのはそこで奪われていくんだよな。時間があればずっとゲームをやっちゃうのかもしれないけれども、子供は。そこをコントロールする親の大変さってあるんだけど。

でも、今言われたように、好きなものに出会ってがんがんに消耗していくというのは、好きなものだったらまだ逆に許される子供の心があるんだけど、これが嫌なことで、例えば小さいときから勉強を好きにさせるというのはこれ、難しいと思うね。その子供のタイプで好きになるということもあるし、指導者によることもあると思うし。ただ、そこで全部の時間をそれに費やしてしまうと、彼らの個性というのはなかなか出てこないよね。この子はどこに向いているんだというのが。

今年の俺のテーマは、そういう機会があれば、お母さん方にちょっと一緒に不安になってみないかというもので。俺はめっちゃくちゃ不安なんだ、今。俺には3人子供がいるんだけど、勉強しないでいいとは一切言わない。逆に、勉強しなさいと言うよ。大切なことだから。まあ、その話はいいとして。ただ、やっぱり好きなことには出会わせたいから。僕も祖父にそうしてきてもらっちゃっているし、そうやってきているから、それは通すしかないんだ、親として。格好を付けられないわけよ。

それで、やれと言うとやっぱり子供は進むよ。

（田中） 昨日とおととい、新入社員で20代の人たちにやる気を持たせないとか今や仕事はだめだろうという話をしてくて、それとお母様方の子供に対する話とすごくかぶったんですね。白金台周辺のお母様方というのは、それはそれは教育熱心なんですよ。とてもいい意味で教育熱心だけれども、与えることの功罪がすごくある。与えることには功もある。だけど罪としては、どうやって子供にプロアクティブさ、能動性をあたえるのか、ということがある。これだけ与えたらどうやって能動的に見つけてくるのかなというぐらいどんどん与える。与えないと母親は気が気でしょうがない。これ、やばいだろうというのは、キャリアトランジション的にもすごく思った。

（重野） それ、子供が混乱している感じですよ。

（田中） 子供はいい子なの、すごくいい子だから一生懸命何でもやるの。でも、一生懸命やるのと好きは違うとすごく思うんです。

（宮澤） 違うんだよ。

（田中） だから絶対与えちゃいけないんだ。機会は与えなきゃいけない。でもこれはやった方がいいよとは、絶対親が言っちゃいけない。それって、そのビジネスコーチングでもとても鍛えられるし、トランジション的にも鍛えられるしと思って、昨日そこですごく悩んだんです。

（宮澤） そうでしょう。選ぶんだよ、子供はね。そこをだから親が我慢だなと。未熟者じゃない、親っていうのは。それに自分も勉強していかなくちゃいけないからさ、親も。だから一生懸命いろいろなものを読んだりするんだけど。

長男坊が、スポーツに向いているというか、うちの家系ではスポーツしか無理だと言ったときに、頼むからサッカーに来るなと思ったね、俺は。だから、俺はお前は野球でも大丈夫だと思うから野球へ行けと言ったんだ。持たせたら左バットで打つしさ、お前だけかっこいいじゃないかみたいなの。それで野球へ行けと言ったんだけど、サッカーに来たよ。

(田中) そうですよ。

(宮澤) 参った。でもそこに来たら責任持つぞ、本当に。

(田中) 親が責任持つということ？

(宮澤) 親がじゃなくて、子供が。親が自分のことをどう思っているのかなんてことへの理解とか、好きなことだとか、そういったことがあると、やはり子供の本来持っている力が出てくるなという感じがするね。そうするともうエクスキューズなんかしないんだ。言い訳せずに頑張っている。すごいよ。

(重野) それはやっぱりミシェルさん自身がお父さんから受けたようなことも多々あるのでしょうか。

(宮澤) 僕はそうだったと思います。たぶん俺はなかなかおやじに日本のことを伝えるだとか、日本の受験戦争のことだとかを伝えるとかというのは、小さいときもできなかったし。ただおやじは、やれやれって、サッカーを。やるんだったら真剣にやれと言って。

俺はおふくろとよくしゃべっていて、いろいろな悩みを聞いてもらっていた。でもおふくろとしゃべっていて、そこにおやじが入ってくると、お前は怠け者だと言われる。もう常に。

けつたいなことに、家にいるおやじだから、わっと入ってきて、怠け者だと言うんだ。いつも怠け者、怠け者って、俺は練習から今帰ってきたのにね。でも、そこには楽器を一生懸命練習しているおやじがいたりね。そういうものだったから、そういう精神だけは植え付けられたらろうな。

(田中) でも一致しない。それはどういう精神？

(宮澤) 頑張れという。やるときやらなきゃだめだろうというね。おやじはこれだけ世界を回っているけど、1曲弾けないからといって、ソファーにバーンっと楽器を投げ付けているおやじがいたからね。やっぱり床には投げなかったな(笑)。高い楽器だからな、本当に。うちのおやじは16歳か17歳のときにヨーロッパチャンピオンを取っているんだ、楽器で。すごいんだ、とにかく。それで25カ国、26カ国回ってきた。俺は、そんなの知らないから、死んでから気が付いたけどね。でも、おやじがチャンピオンを取った演奏会するとき、教わっていた先生に、「まあ、今日はよかったけどもっとよくできるな」ということを言われて、もうしこたま泣いたと言っていたよ。何で分かってくれないんだって。これだけやってこうだったのにまだまだと言う。

その昔流儀の教え方があって、ある面俺にもそれで失敗したことがあるな。俺はちょっとおやじに伝えようとし過ぎたかなということもあるし。いろいろなことを感じさせてくれるおやじだったな。

(田中) いろいろなことというのは、じゃあ、いい面も悪い面もあったということ？

(宮澤) あったね。

(田中) いい面だけ今残してお子さんに教えていらっしゃるんですか、それとも？

(宮澤) いい面だけかな。なかなか自分の子供にもっと、だとは言えないよな、一生懸命やっているのに。何、そんなものみたいな。長男坊なんかサッカードをやっているけど、どこの角度から見ても下手くそだと思うわけじゃない、俺から見ると。だから来ないでくれだとか言う。

息子は J リーグクラブの下部組織のチームで頑張っていたんだ。格闘したわけ。でもそこに残すか残さないかっていうボーダーラインにいたと言われてたわけよ。まだのっぽみみたいな細いやつだったから、それでボーダーライン。でも専門家が見に行ったときはいいレベルを見せていた。あ、これで残されるんだと思ったら、そのチームがほかから選手を採ろうとセレクションを開いた。でもそこでは上回る人がいなかったんだね。

そうしたらすぐ、ミシェルさん、息子さんをやっぱ残すことに決めました、と。それで俺が出来が悪いけど頼むわと言ったら、それを言われている息子の方が、いや、僕はもう一切そこでプレーするつもりはありませんと。そうして、千葉の名立たる学校のセレクションを全部受け始めた。

(重野) 血なんですよ、そういう反逆精神。

(宮澤) 俺は驚いちゃったよ。

(田中) それでどうしたの？宮澤ミシェルさんのキャリアトランジションじゃなくて、息子さんのキャリアトランジションになったら、お許ください。

(宮澤) 結局は千葉の学校でやっているよ、今。もう千葉県代表になることなんかないような学校で、もう気合だけ入れてやっている。だから俺、見ていると、どうするんだ、お前、こんな学校にいて、って。

(田中) 彼がそこを選んだときにはミシェルさんは父としては何も言わなかったんですか。

(宮澤) 言った。情けない言葉を使ったね。

(田中) 何って？

(宮澤) お前、そこに行くんだったらもう選手権だとかユースだとかそんなの一切抜きだからな。もうないぞ、そこの学校にはないぞと。ただ、お前が選んで行くのなら行けと言ったら、悩んでいるのはおやじだけだと。俺はここでやりたいと言って。それで行って、今後悔しているよ、やつは(笑)。後悔しているぞ。後悔というのは、俺の勝手な言葉で、やつは絶対後悔していないと思っているよ。でも実際、勉強ばっかりの学校だし、どうするんだって。メンバーもいないで、全

国に絡むなんてことはない。どうするんだって俺はプレッシャーをかけているよ。でも自分も次のレベルでやりたいと思っているから。

俺も高校は第1希望の学校には行けなかった。勉強するのが遅れた。それで第2希望に入った。大学は、ほかに行きたいところがあったんけれども、大学では強いところに行かなきゃいけないと思って、その当時は国士舘大学にそういうものがあつたからそこに入った。初めて中央に出て行ったら、やっぱり自分のレベルのなさというものが分かつたよね。千葉県ではナンバーワンでやっていたかもしれないけれども、全国から来る帝京だとかの出身者は、同じ年で紅白ゲームをやっても、もう人のポッケを引っ張ってくるし、横からけりを入れてくるし。はあ、全国ってこうなんだと思って。そこからどうやって上がっていきかなんかということをやっていた。そういう流れでできていますよ。

だから、自分の第1希望を通らなくてもね、第2でも第3からのし上がってくるやつはのし上がってくる。Jリーグなんかでもそうだからね。セレクションに落ちたやつから、落ちた子供たちから必ずJリーガーというのは出てくるよ。

やはり何かコンプレックスだとか何かをがっと思ったときに、その反動でどんと伸ばしていくというのは、やっぱり人間の中にあるね。

俺、国籍ということで話していいかな？

(重野) どうぞ。

(宮澤) やっぱりフランス人として生まれてからずっと、僕らの時代はおやじの籍を名乗るしかなかった。フランス人しかなかった。それで日本人になるためには帰化申請をしなきゃいけない。僕は、例えば高校時代に国体に出場したいと思えば、国籍を変えなきゃいけなかった。そこからその手続き始めるんだけど、全然認められなくて。フランス側からも、国籍の大切さはお前に分からない、10代の子供なんかに分からないと言われて。そのころは選択権とかなかつたから、ずっとそのまま引きずって。日本の国体に出たい、ユース代表に出たい、ユニバーシアードに出たいと毎回思っていた。選ばれていたから、そうしかつたけれども、全部それはだめだったよ。

大学のユニバーシアードのときなんか、監督に、お前はパスポートまで外国のパスポートかと聞かれ、それじゃあだめだと言われて。え、何がって思ったよ。俺はユニバーシアードに行こうと思っているときだよ、選ばれてさ。なのに、それはだめだって。あんた、分かっていないのって。俺、ずっとそれで。最悪だった。俺は落ち込んだぞ。ユニバーシアードだけは大丈夫だと思っていたから。全部こう、そういう道では八方ふさがりだ、僕は。

(田中) ミシェルさんは初めての外国人だよ。

(宮澤) 初めて。そういう中でも高校3年のときに、いろいろ、あらゆる人の手助けによって国体のルールが変わった。変えてもらったわけだよ。オリンピックの団長までやった人が、俺のことは見ておかしいじゃないかと言ってきて。話もさせてもらってね。おかしいよ、じゃあ、変えてやるみたいなことで、いろいろな高校の先生とかが手伝ってくれて、初めて外国人として、僕は滋賀のびわこ国体に出させてもらったね。

もうおふくろは大泣きだし、大変だったよな。だから、自分はただ進んでいて、進むことによって周りが動きだしたというのはずっと感じていることです。周りの人が変えてくれているというのは

あるし、そういう気持ちは常に持っているね。そのときに頑張んなきゃいけないというのは自分の中にあるんだけど。頑張るんだという気持ちがあって、それだけは守っていないとそういうことにたどり着けなかった自分っていうのが間違いなくあって。そこを失うことが怖いんだ。その一生懸命でいられない自分になっちゃうときに怖さを持っているというか。

(田中) 一生懸命でいられない自分。

(宮澤) その姿勢を持ち続けられないということ。今、お前、一生懸命かって。俺さ、いつも、ごめんね、こういう言い方になっちゃって。どうしていいか分からなかったから、眺めているんだよね、上から。自分がどうしていいか分からないから。お前は出られないよと言われてたら、ああ、もうしょうがないって。だって俺、おやじがフランス人だもの、しょうがないやと。フランス語を今から勉強して、ボンジュールだけでも言えるようになるとかさ、ボンソワールだけでも言えるようになるようにするかとか、そういう自分になるわけ。

ところが、現実にはサッカーで進んでいるから、悔しいじゃない。チームメイトが、あんなやつが代表になって。俺を入れてくれよ、みたいな。そうするとまた大使館に行って書類を自分で出して、頼むよって。フランス大使館へ行って言葉がしゃべれなかったら受け付けてくれないんだから。ハローなんて言ってもだめなんだ、アローだろうと言うぜ。アローと言わなきゃだめなんだ、フランス大使館は、本当に。硬いから。でもそういうふうにはやっけていながら、いつも、いや、俺は母親が日本人だからいいんだ、このままでとか、俺は本当のメンタリティーは日本なんだよとか、それはいつもこうなんだ、ふらふらふらふら……。だから精神的におかしくなったんだな。そういったところもあるのよ。ある、ある、ある。いつも笑ってしゃべっているけど、対人恐怖症だったりいろいろ、いろいろなことが出てきた。こんなことは普通話さないんだけどな。今日は……

(田中) さっきの一生懸命になれないのが怖いとおっしゃったところ、そこをもうちょっと教えていただけますか。環境？

(宮澤) 自分が何かに向かっていないとだめだという。それはやはりおやじが植え付けちゃったのかなという。会えば、お前は怠け者、怠け者と言われて育ったから、たぶんそこをマイナスに受け止めたのかどうか分からないけれども。今はリラックスもできるようになったけれども、常に何かを求めてやっけていなきゃだめなんだという姿勢だね。ただ、それがもしかするとあの当時の俺にはよかったのかもしれないね。だって何も夢がかなえられないんだから、とにかくおやじはそれを俺に言いたかったのかもしれない。やれと、とにかくやれと。

ただきつとあの人もそうやって進んできたんじゃないのかな。

(重野) いろいろなことが八方ふさがりだという時期、その頃は何を支えにしていたのかなとすごく思うんです。

サッカーは好きだしやるんだけど、それをやってもやっても認められないという現実がありますよね。そこを突きつけられたのに、ミシェルさんは何で進んでこられたのかなと。すごくそこがポイントなのかなと思って。それが今、一生懸命やっけていない自分が嫌だということにつながるのかなと。

(宮澤) もちろんチームには仲間がいて、彼らと一緒に勝ちたいという気持ちもあったし、1 つ上に北朝鮮の方がプレーヤーとしていて、あ、俺よりもしかしてこの人の方が厳しい環境にいるのかもしれないって思っている。彼がいてくれたことも、僕にとってすごく励みになったのかもしれない。だからそこだね。最初の子供頃の話に戻るけど、サッカーは好きなんだよね、自分が。好きでいられるから苦しいことでも平気で乗り越えていけるじゃないですか。ただ、その外枠、代表に選ばれないとか何とかで行かせてもらえないというのには打ちのめされるんだよね。

そういうことを耐えてさえいれば、そういう自分が好きなんてそんなきれいなことを言いやがったけど、そうすれば国体に出られたり、大学から呼びにきてくれたりとかそういうことがあったりして。それで、え、まだサッカーができるのかとか。だから、その姿勢を変えさえしなければ、進んでいけるんだというのはあるよね、人間として、たぶん基本形が。いろいろなことがありますけど、基本形が純粋であるとか。何を例に出したらいいかな。じゃあ人物としてどうかというところを見たときに、そこが腐っていたら、人間腐っている人はいないんだけど、そこがぐちぐち揺らいでいたら、そのときにももちろん結果も出ないし、何かをできるようにはならないじゃないですか。

でもそこだけ、こいつ、ここだけはしっかりしているなとか、こう見たときにこれは持っているぜというのは探り出したくなるよね。それだよ、そこ。じゃあ、今うちの坊主を見たときに、もう監督がめちゃくちゃなことを言っているけど、まだあるなという感じはするものね。見て何もうまくないんだけど、こいつには何かありそうだという。それは大人、僕ら、大学の先生にも、俺を呼んでくれた大学の先生にもそういうのを感じたし。

(田中) まとめのときに聞くべきだと思うんですけど、今聞きたいのでお伺いします。ミシェルさん、それこそキャリアトランジションで、よく普通の元選手が来てくださるときには最後に伺うんですが、ミシェルさんはいろいろなことが普通じゃないから(笑)。

(宮澤) やっぱりおかしいんだよね。今日は悩んで帰る。いや、いいんだ、俺はそのために来ているんだ、うれしいんだ。勝手に来ているからさ、俺。

(田中) よくキャリアトランジションの一番の問題として、選手というアイデンティティーがなくなったという、自分は選手じゃなかったらもうどんな人間でもないみたいな感覚を持つ人、言い換えると、選手というアイデンティティーだけを持っている人は非常にトランジションがスムーズに行かないよという話が、よくこの勉強会ではよく出てくるんです。今日、ミシェルさんにはこのアイデンティティーのことをどこでどういうふうに関心かなと思っていました。

いつごろからか、もしかしたら今でも悩んでいらっしゃるのか、今でも正解は見つけていないのか分からないんですが、伺います。日本人としてだけしかアイデンティティーを持っていない私たちは、例えば私だったらシンクロ選手という執着を残そうか捨てようかと悩んだ時期があって、アイデンティティーの葛藤をするんですけども、ミシェルさんにとって、サッカー選手とかサッカーに携わっている人間という宮澤ミシェルに対する葛藤は、逆になかったのかなと思っちゃったんです。もっと根本のアイデンティティーであまりにずっと葛藤しているから。

(宮澤) もちろん現役のとき、Jリーグが始まったときを僕は30歳で迎えたんだけど、それで3年間だけやらせてもらっているときには、もちろん夢のプロリーグができてそこでプレーするということは、ただもう体もギコギコ音がしていたからまずいなと思いつつも、やっぱりそれは夢

としてやりたかったよね。だけど、1年目、2年目をやったらもう終わりたくなってきたというか、もういいよと、体もあれだし。そのころに僕は国籍も日本人になって選ばれるんだ、代表に。だけど、まさか選ばれるなんて思っていないし、もうその代表というものはもう自分の中である面捨てていたものだったから、何もない。当時の代表監督だったファルカンは、もう若い人しか選ばないという監督だったから。もう全然何もなかった。

ただ、ある人と相談させてもらったときに、そこで、じゃあお前は自分の子供たちにも同じような思いをさせるのかということになって。それだけは嫌だと思って俺は国籍を変えていったわけ。申請を出していたんだよ。そうしたらそこに日本側は食い付いたんだな。申請もずっと出ているし、ちょうどいいや、けが人もでたからミシェルを入れよう、みたいな。

(田中) そんなだったの。

(宮澤) それで次の日に、新聞に「日本の秘密兵器」ってすごくでかく載った。本当だよ。最初はオフト監督のときだ。日本の秘密兵器って、こっちが驚いちゃって。国籍も変わっていないよ、まだ、みたいな。そうしたら役所に呼ばれて、書類にサインしてくれと言うわけ。何で?って言ったら、「日本人です」って。俺、十何年もやってきているんだぜ、国籍のことで。それなのにいきなり日本人、認められましたからって言われて。だから俺、このとき、役所って…って。俺、役所恐怖症にもなったことがあるんだよな、それでもずっと回っていたけど。

でも、もう本当に、何で?ということの連続だな。それで急に代表ですなんて言われても、僕は選ばれるなんて気がなかったから、前のゲームでもずっと無理をしていたからもういけないよ、って。選ばれるんだったら、日本サッカー協会ももうちょっと早めに言ってくれればサボっていられたのよ、初めて。ところが脚が痛い。でも記者会見だけは足を引きずらないで、部屋を替えて2歩でたどり着けるような部屋にしてもらって、今日はどうもと言ってやったよ、代表の記者会見は。でも、もうだめなことは分かっているから。いや、惜しいことをしたな、なんて思っていた。

そのときには、もう選手としてのありがとうしかなかったものな。もう早く、もう人のことを蹴るのも嫌になってきたし、追いつけないし、つかまえるのも嫌になってきたし、何か違うものをもう読み始めている自分があったし。人間としてという、そういうものを読み始めていたな。

(重野) 本とかを読むということですか。

(宮澤) 本とか。

(重野) そういう方に変わってきたんですか。

(宮澤) 変わってきた。だから弱いだよ。自分はどうやって生きていけばいいんだなんて感じだった。俺はそのとき、最後の1年は、本当に金をくれるからやっていたけど。いや、冗談ですけど。

(重野) いや、本音ですね。

(宮澤) 3割ぐらいで聞いておいて。でも本当に、いやーと思って。それでいろいろなことを悩

みながら。だから試合前に全然違うことをやっている自分があるんだよね。選ばれた、メンバーに選ばれたなんていってホテルに行くと、1人部屋にしてもらってこうやって読んでいて、やばい、もう4時だ、5時だとか、えー、みたいな。いや、どうしよう、取りあえず寝るかって。眠れない中で試合をやったことも何回もあるし。もう違うことをやり始めた。ただ、どこかに指導者として残れる自分がありそうだなとか、そういうものを感じていたのにゼロにさせられたね。

そのタイミングだった。もう何もない、指導者としてチームに残れるわけでもない。もう全部ゼロになる瞬間があって、そのときにカウンセリングを受けた先生が今この席にいます。

(田中) うそ。

(宮澤) その先生が俺にいわく、うん、大して悩んでないと思うな、余裕があるなみたいな。そういう判断をしてくれたよ。ミシェルさん、いくつも回答は出てくるし、それが高校を卒業したばかりでJリーグを2年やってぼんと切られる選手だったらそうはいかないから、って。やりたいことを、って何やるって。そうだな、子供とどこかに出掛けたいな、なんて言葉も一切出でこない。とにかく高校の先生のところに行って相談するという。それで、ああ、なるほどそうかと。

でも不安だったよな。子供とずっと遊んでいるばかりで、それが楽しくて。脚の痛みもなくなってきたし。朝起きて、本当に運動選手が言う不安になることもないよね。選手だったら、トイレに行くときにアキレス腱でも何でも、あ、やばいというのが来るからね。でももう選手じゃないからそんなの別に痛くてもいいんだよ、行くぞ、ディズニーランド、みたいな。ほら、マックを食って、モスバーガー食って、うまいじゃないか、なんてね。それで5キロ太って。

そうしたら、女房からお告げが来たよ、パパ、これからどうしていく? って。どうしていくか。ばか、そんなの考えているよ、ちゃんと、って言ったけど、何も考えていなかった、俺。どうしていつて、だって。ところが、移籍しようと思っていたら、そのときにそのタイミングで解説者をやってみないかというお話がNHKさんからあった。でも俺は現役にこだわっているんだと言ってお断りした。でも一月ぐらい過ぎてくると、テレビも悪くはないと思ったんだよね。テレビがというか、僕は解説は好きじゃなかったから。言いたいことを言えないし、選手たちにまた輪をかけてがんがんきつく言うというのは、だけどテレビの世界はもしかしたらあるのかもしれないなと。こういうタイプだからね。でも、いや、何でもいいから誰か来てくれないかな、なんか話がこないかなと思っていたね。

そうしたときに、やりたくなかったけれども解説の話が来て。そのころはもう給料明細も来ないから、寂しいですよ。現役を終わってもう何もないからね。それで、みんなから掛けてもらう言葉で一番傷つく言葉は、競技場へ行っても、現場へ行っても、「ミシェル、今何しているの?」これ、しんどいね。

(田中) それ、一番キレルよね。

(宮澤) これは刺さるね。刺さって、もうはじき返す自分がないわけだからな。刺さって、受け入れて、抜けちゃうわけだから。そうなんだよ。

(田中) あれ、きついね。

(宮澤) きつい。

(田中) 今、何しているのと言われて、「いや、ちょっと特に」とか言うと、「これからどうするの？」って。お前に言われたくない。

(宮澤) これからどうするのとかね、いまだに言われるな。もう、テレビにちょっと出ていないと、今何やっているのとか。それが愛情に包んだ言葉のように感じられない、僕にはね。やっぱりデリケートな僕を扱うんだから、もう少し見て、って。やっぱり言葉というのは大事だね。どうやってオブラートにくるむか。俺、そういう自分が嫌いなんだけど、でも分からない人には、失礼極まりない人にはやっぱり伝えるしかない。分からせなきゃ。俺、そういう人間じゃなかったんだけど、でもそれは伝えるしかないんだよ。

(田中) ちょっと前になりますけど、自分がすごく嫌になるのは、名刺交換するときとかに、「あ、田中さん、よくテレビでお目にかかります」ってと言われて、「どこの番組ですか？、オンエアは最近全然ないんですけど、どこですか」と聞いてしまうとき。すごく嫌なやつ。だけどやっちゃうの。

(宮澤) やっちゃうよね。

(田中) それ、すごく嫌だな。

(宮澤) だから、いつも応援していますとかより、本当に何かを聞いたんだとしたら、雑誌の1行でもこういうことを書かれていましたよね、とかいう方がまだいいよね。全然俺、今いけないんだけどみたいな、うーみたいなね、ところがあるじゃないですか。だけど、まあ。

(田中) 脱線しちゃった、ごめんなさい。

(重野) いえいえ。

(宮澤) でもそれが僕のあれですよ、食べていかなきゃいけないというスタートが解説業でしたよ。取りあえずやってみようかって、こんな気持ち。でもやる以上は何かを伝えなきゃいけないということで。そこなんだよね、僕は。そこに向かう姿勢なんだな。俺は何人もJリーグ上がりの選手たちに、先輩として偉そうにこうやって。あの当時スカパーもやらせてもらいましたから、スカパーに行くときには資料を持っていったよ。そうすると、後輩が、これ何ですか、ミシェルさん、とか言うから、俺、海外は分からないからちょっと調べてきたんだって言って。こうだ、こうだ、ああだと。そうすると。

(重野) メモね、解説の。

(宮澤) 解説のメモを持っていくわな、Jリーグでもやるけど。わっと持っていくと、武田とかも最初のころ、え、何、それ、何って。そうやってしゃべるの、解説って。やつらは選手を終わったばかりだ。2年目の俺がメモを開いたりすると、え、何、ミシェルさん、何、何、これは、何？ って。それで気が付くわけ。だって何も分からないで、例えば新しい選手なんか分からないでしゃべって

いてもさ、それは失礼ってもんだよな。そこに感じる姿勢というのが、もしかすると僕の中にちょっとだけあるのかもしれない。だからそれを崩せない。逆に言うと臆病なんだな。何もなくて行っても何もしゃべられないだろうと思っちゃう臆病さがあるんだよね。臆病は臆病だから、たぶん。後で分析して。

だからそういったところが何かにつながるのかもしれない。僕は人が好きだし、人に助けられてきたし、人が周りにいてくれることが大好き。だから悪い人も寄ってくるし。俺は現役が終わって、でかいサギにも遇っているし。もう警察沙汰になって、やっと 5 年後に逮捕されるという。ばか者だったね、信じて。おお、そうですか、それはいいことですね。じゃあ、やりましょうって言ったら、次の日からいなくなっちゃったとか、いろいろ。

(田中) 笑うところじゃなかった。

(宮澤) いいのよ。でもね、僕、ポリシーはあるんですよ。一緒に何かをやるというときに、こうやって見たときに、お話を伺ったときに、うーんというときには困っちゃう。だから人からビジネスとして考えなさいとかさ、何々として考えなさいってアドバイスを受けるんだけど、うーんってね。その路線というのが 1 つないと僕の中でだめですね。

(田中) ミシェルさん、今、何人(なにじん)なんですか、ミシェルさんは。

(宮澤) 今ね、ミシェル人になったね、やっと。

(田中) 言うと思った。

(宮澤) やっぱり? 本当にね。あ、だから僕は 33 歳で引退するまで、国籍をはじめいろいろなことで悩んで。もちろん悩んでばかりではないです。いいときも味あわせていただいたし、J リーグのオープンも味わった。ところが解説業をやり始めてからすべてが戻ってきた。

(田中) どういう意味?

(宮澤) 俺は選手としてはオリンピックもワールドカップも、アジア大会ですら、何も行けなかったけれど、解説者として全部行ってきた。この 6 月にまたヨーロッパ選手権。俺、頼んでもいないのに。でもね、俺、1998 年のワールドカップ、しかもおやじの国であるフランスに日本が初出場で行って、俺が解説者でいるというのは、もう神様にありがとうと言うしかないなと。こういうドラマを作るの、あんた、という。素晴らしいなという感じがした。

今は、そういうことを振り返っちゃっているけどね。もう、大学のときは変な外国人、変な外国人と呼ばれていたものね。変だよなという。言葉もろくすっぽしゃべれないで日本のものばかり食って、べらべらべらべらべらんめい調で。でもそれが、俺は変でいいやと思った。

(田中) いつごろ?

(宮澤) 大学の 3 年生ぐらいのとき。自分たちが大学 3 年生になって、上に立ってやっと神様

のちょっと手前まで行くわけじゃないですか。

(重野) 上下関係が特に厳しかった時代ですよ。

(宮澤) 上下関係ね。そうしたときに、そこで自由な時間を持てるようになったら悩みにはまっ
ていって。そのときにポジションを替えられたんだ。絶対的なスピードがそんなにないから。もうオ
フも家に帰らないで、自分 1 人で寮に残ってがんがんやったもの、死ぬ気で。腿も何センチも太く
して、よしてよろいを付けて、これで今年は絶対大学リーグで得点王を取ってやる、って。その 1
週間後に合宿が始まって、ばりばりいけているのよ。なのにコーチ陣 2 人から、今年はディフェ
ンスの中心になるやつがないからお前がやれって言われて。もう奈落の底。

初めておふくろに電話したよ、俺。ほら、あのころはまだ J リーグのチームはなかったから、企
業のトップでやりたいという気持ちはもうあったんですよ。その気持ちがあったから、トップ下(セ
ンターフォワード)から、ディフェンスをやれって言われていも、いやいや、できない、俺にはそん
な時間はないんだよ、と。もうそこから半年間は言い訳の人生。覚えているよ。だから全部で悩む、
そこで。だってグラウンドに出ていって、ばんばんシュートを決めて、見せてやるというのだったの
が、今度は守れと言って。今までばかにしていた友達にがんがん抜かれてさ。抜かれて、抜かれ
て、いや、どうしようと。それで初めて電話した、おふくろに。もうだめかもしれないとか何だとか。
そうしたら、何、好きなサッカーをやっているのに、って。おふくろはいつもそうなんだな。好きなサ
ッカーをやっているのに、って。

(重野) でもディフェンスでプロまで行きましたものね。

(宮澤) 行ったの。だから、それもあるんだ。

(重野) すごいですね。

(宮澤) ディフェンスで 2 年間必死にやったよ。必死にやった、2 年間。そうしたら数少ない球
団だったけれども、いくつかあって、ディフェンスとして誘ってくれたんだよ。間に合ったと思ったよ。
本当に間に合ったよと思ったよ。

(田中) 何に？間に合ったとはどういうこと？

(宮澤) 俺はそこのレベルでやりたかったから、間に合ったと思って。おふくろは当然俺は体育
の先生になると思っていたから。おふくろに、やった、いくつかチームが来てくれたぜと言ったら、
おふくろは何と言ったと思う？ まだやるの？と。俺のことを何も分かっていないけど、いい一言だ
ね、まだやるのって。やるんだよ。おやじはやれやれだ、いつも。おやじは何でもやれやれだ。間
に合って、企業へたどり着いた。だけど、俺はあそこでディフェンスをやらなかったら 30 歳のとき
の J リーグにはたどり着いていなかったよ。あのまんまフォワードをやっていたら、俺の最後の夢
のプロリーグというのにたどり着いていなかった。けがも多い選手だったし、スピードはないし、だ
ったし。

俺ね、だからぞっとするよ、そういうことを考えると。いや、ぞくっとする、ぞっとしちやいけない、

ぞくつとする。ぞくつとするよ。本当なんだから。

一中略一

(宮澤) 今、不思議なことが起きています。というのは、先生にお会いしたときに戻っているような気がするんです、今ね。というのは、それが僕には周期なのか何のかよく分からないですけど、そういうふうにも来ているんだけれども。僕は現役を辞めて一番最初に人の前で話をさせてもらうというのが、今千葉市原の市長になった方がやっている倫理法人会って皆さんご存じですか。会社の社長さんたちが朝 5 時半とかに部屋に来て、6 時ぐらいからそういうミーティングをして、ぱっと、企業心とはみたいなことだったり、あと人間とは、ということの会があるわけですよ、会社の社長さんたちのね。そこで話をしろと言われたの。俺の何が聞きたいんですかって、俺、現役を辞めたばかりだし。そういう機会があった。そのときに涙を流してしゃべる自分があったよね、引退しちゃったということとか、国籍のことだとかといったら。俺、結構平気で講演会のときは涙が出てくるんだ。涙もろくなるのか何なのか知らないけれども、いろいろなことがあり過ぎて。

それでこの間、僕、金沢の方に今サッカーチームを、金沢市の方にツエーゲン金沢という、北信越リーグのまだまだ小さい、小さい、下のチームをつくって、みんなで立ち上げて、そこに乗った自分があるんだけれども。そこでまた倫理法人会に呼ばれて、朝の、ミシェルさん、こういうところ初めてですよって。ぱっと見た瞬間、いや、初めてじゃないって、2 回目だ。それで今でしょう。何かそこへ今来ているから、だからこの会にも、俺はお 2 人に、ごめんなさい、こういう本があって、本と京さんはたどり着かなかったんだけれども、でもたどり着いたことと、重ちゃんはずっと僕サイドにいてくれたから、こういう会があるんだっただけひというのも、自分で、皆さんには迷惑だったかもしれないけれども自分で越させてもらった。

それが、自分もそこに何かここから例えば解説業なのか、そのツエーゲン金沢なのか、お話しする講演業なのか、いろいろなことがあるんだけれども、どこかの選択肢に行くんだというのは感じている、今。例えば、じゃあ、本を書けと言われても本を書く能力が僕にはない。ないけど書けと言われる。えっという、どうするんだというところに来ているんだなというのを感じる。ここにも 2 人に呼ばれて来ているとか。自分で来たんだけれども、ここに会いにきているんだなとか、皆さんの前でまたこうやって自分を言って、言わせていただいてどこかへ行くんだなというのがある。

その辺が、だから今すごく楽しい気持ちでここに来た。こんな仕事でこういうときってないですよ、あんまりね。皆さんはどうか分からない、でも俺はすごくうれしい気持ちだよ、ここに来て。もうどきどきして、今日どうなるんだろうと思って来て。うれしくなっていて、いろいろなことを考えたら、電車も反対側に乗っちゃうし。でもこれはいつも運ばれていく自分じゃなくて、俺がここに来たんだということ。だって何かを得たいから来たわけでしょう。来るじゃない、動くじゃない、人間は止まっていられない、やっぱり動かなきゃ、何か決断したいと思うから。俺はそういう弱さがあるのね、自分で。だから声をでかくして言いたい、その俺はここに今日来たという。呼ばれたとかじゃなくて、来させてもらったという事柄。

先生がまん前にいるでしょう。うわあ、来たと思って。やっぱり 13 年前だと思ってね。皆さんの顔を見させてもらって、まだほかにもいるんじゃないかと思ってどきどきしているんだよ、本当に。え、待てよ。そういうことばかりなんだ、俺の場合は。だってそうじゃなきゃ生きてこれなかったもの、つぶれて。国体に出られるなんて、王選手は出られなかったんだよ、あんたは出られる

なんて言われても分からなかったけど、でも人によって出させてもらったし。だからぜひ、皆さんにも、そういうことじゃないですか、人間って、たぶん。何をやっても同じ勉強を繰り返すんだと思うな、俺は。わずか 45 年だけでも、たぶん同じところにたどり着いていくんじゃないか、みんな何をやってもね、スポーツだろうが、音楽だろうが、会社勤めだろうが何でも。と思いますよ、僕は。

(田中) そろそろまとめさせていただきます。今日の語りは、ぴんと来ない方はきっと全然ぴんと来ないんですよたぶん(笑)。単なる、宮澤さんって面白い人だなで終わるのも、もちろん別に正しくも間違ってもいないから。ただ、今日のお話は自分としてはキーワードがあまりにすぎて、ぽっとおっしゃる言葉のその裏がとても興味があって。だからこの限られた時間だけでは全然聞けないなと思って。あ、これはもうご参加いただいた皆様にも、この時間の足りなさが申し訳ないのですが。

もっと質問をして伺わなければ全然何も分からないんですけど、ただ、勝手に想像すると、究極の語りだなと思って。ごめんなさい、節目のキーワードとしたら当たり前のことしか浮かばなかったんですけど。やっぱり好きというのは、必ずいつの勉強会にも入ってくるし、当たり前だけどもとても重要なこと。今回、ミシェルさんもそうですが、すごく人ということが、いろいろな意味での対人ということがすごくお出になった。ネットワーキングという意味でも、サポートという意味でも、人とぶつかるという意味でもそうだし。

何か進まない、向かっていないと怖い、というのはとてもよく元選手が言うコメントです。たぶん節目のときに、向かっていないという谷底のときに落ち込むのかなとか、向かう場所が分かったとか、上りが見つかったときにはもう急にエリマキトカゲのようにぴゃーってみんな走っていくというようなところも、ミシェルさんはあるのかなと。これはまだ仮定ですが。

あとは、やっぱりこれだけ楽しいとかこれだけ面白い方であることの意味は、つまりは感情が敏感であるということです。それこそかっこつけた言い方をすれば EQ が高い。ということはすごく悩まない、落ち込まないと感情に敏感になれないから、そういう意味では楽しい人というのはすごく表裏一体で、落ち込んでいる量が多くないとそうはなれないなということ。それはすごく究極に言っちゃっていますけど、感情のガスコンロをぐちゃぐちゃにできる人間じゃないと、あれ、いつの間にか消えちゃったよとか、いつの間にかコンロを壊しちゃったということをするから、みんな心理的に悲しくなったり怒りのコントロールができなかったりする。こういった意味では、ミシェルさんは、今日は強火で行こうぜとか、今日は弱火でいいんだよ、みたいなことをご自身で無意識のうちにもコントロールしていらっしゃるように見えて、とてもすてきなと思いましたし。

最後のキーワードは、「ばたばた」。人生ばたばたでいらっしゃるのがとても魅力があって、とてもすてき。何か分からないんだよ、みたいな感じでばたばたしていらっしゃる。ずっと小さいころからのアイデンティティーでばたばたなさっていたり、お父様、お母様の間でばたばたしたのかなとか、お兄様との間でばたばたしたのかな、高校、大学で選ぶとき、ユニバーシアードのとき、フジタに行ってからかな、とか。そのばたばた劇がとても魅力のある方なのかなと、全然まだ十分には聞けていないけれども、すごくそれを感じました。なので、最後にもう 1 つ質問したいんだけど。

最後に質問したいのは、ここの参加者の皆様って元アスリートの方もいらっしゃるし、今まさにどん底で谷にいらっしゃる方もいるんですよ。あるいは、そういう選手を支える側の方々もとても多いんです。キャリアサポートをやっていらっしゃる方とか、その代表をやっていらっしゃる方

とか。選手ってどんなごちゃごちゃがあって、それを私たちは、僕たちはどう助けたいんだろうということに来てくださっている方もとても多いんですね。そういう方々に何かまとめとして、お願いします。

（宮澤） サポートの方に対して？

（田中） サポートする方々の方がいいかな。何かあれば。

（宮澤） 僕は、ずっと面白おかしく、好きなように面白おかしくやっていたんだけど、国籍の話なんていうのはずっと悩んできたね。だけど、聞いてくれる母親がいたのよ、僕には。それで答えはないのね、答えを出せなかった時期がずっと続いて。でも母親がいくれたから、粘ってこられたというかな。いつもこうなるの。俺は泣きたくなんかないんだよな。たぶん何か深いダメージを受けているんだね。情けないと思っていつもむかつくんだけど。

話を聞いてくれる、その人がいてくれなかったら、俺はだめだった、本当に。だから皆さんにはそういう人になってほしいというか。アスリートが、次が何か分からないだとか、タイムが上がらないだとか、届かないだとか、何だというときには、横に人がいてくれることがまず大前提だね。自分の中の格闘は、それはある程度のレベルの選手だったら自分でコントロールしていくけれども、最初はそこだと思っているから。俺は子供のことは、もうどういう悩みでも、例えばワールドカップなんてやっていると家に帰る時間が、どうしても遅くなるけど、家へ帰ったら子供には悩んでいることがいっぱいあるわけ。それを全部女房が聞いていて、俺が帰るのを待っていてがと来るよな。俺はシャワールームを開けて、全部話せと言ってシャワーを。もう時間がないから、寝たいしさ。そこでわつと言ってもらって。

でもそれは、やっぱり知っていたいというのが必ずあるから。何かを俺に伝えたいなら全部しゃべってくれというのもあるね。だって自分がそれで救われてきたから。それがなかったら僕はここには座らせていただいていないし、何もできなかったと思うから。弱いんだ、そこがたぶん弱いんだけど、でもそれはお願いしたいな。もちろんいいアドバイスができればいいんだけど、横にいてくれるだけでいいというね。

（田中） すごいな。だってもうそれって、今たぶんコンサルタントとかキャリアサポートをやっていらっしゃる方には、今その意味はあまりに深くてどんと来たと思いますよ。私、それで大失敗したんです。先月、それができていないことですごく失敗をしているんですよ。たかが聞く、されど聞く。人の話を仮定でとらえない。今、思い切り仮定でとらえちゃったけど。聞く、最後まで聞く。期待しないで聞く。教えないで聞く。自分が教えられる立場なんて思うこと自体 100 年早い。なのに、気付いちやっているからさって先に言ってしまう。それでぼろぼろになって、大失敗。横にいるということをしていなかった。たぶん、自分がちょっと上なんですね。だから失敗しました。

横は横じゃないですか。横の人って、伴走者とかいうのと一緒に、横で聞くから、前が見えていないから初めて一緒に前を探せるのに、私の失敗は、1 つ後ろに行っていることに優越感を感じてしまっていたから起こったんです。ほらね、見えているよ、あなたのこと、って。全体像は見えているよ。こうこうこうで、こういうふうに行っちゃうから気を付けた方がいいよ、って。前に行っちゃいけないのは知っていたんです。だから後ろに行っていたんだけど、後ろに行くのも大失敗だったということ。それがすごく痛い。横というのはその意味でとても今、心にぐんと来ました。たぶん

皆様はそれぞれ、いろいろなとらえ方でとらえると思いますが。

—中略—

(田中) お母様とはまだお話されますか？

(宮澤) 話します。

(田中) お母様のおっしゃったことで印象に残っていることはありますか？

(宮澤) おふくろは聞いてくれたということがでかくて。聞いてくれる人がいるとすごく子供も救われるというか、それで半分もう解決している、実はね。吐き出すところがあるというところで。子供が学校でいじめを受けていても、それを聞いてくれる人がいたりすると、また子供によるけれども、学校には取りあえずは行けるみたいだね。だから、ごめんなさい、いろいろな言葉があるけれども、あえてこのまま生きているということなのかな。

(田中) 私、それが今すごいと思った。何でかって、きっとお母様は何もサジェストしなかったんだなということに感激しました。それって、聞くことの究極ですよ。私も同じように母がずっと聞いてくれたんですよ。夜の10時に練習から帰ってきても、朝の3時半に朝練のために起きなきゃいけないけども、いつも母が横にいるんですよ。母は、3時半に朝練のために起きて目黒から池袋まで車で送ってくれるときも、私の話をずっと聞いているだけなんですよ。

引退するその日に、池袋で朝練習があつて、違う、オリンピックに行く直前だ。その翌日にソウルに行くからといって池袋の練習が最後の日だったので、朝5時ぐらいに池袋の駅に着いたときに、ママ、長い間ずっと毎日送ってくれてありがとうと言って。でも1つだけ言いたかったのは、何を言ってもそれはそういう考え方はしちゃだめだよとか、その考え方はいいすらも言わなかった、ただひたすらふーん、へーで、言ってくれてありがとう。だから自分は何でも自分で決められたと言ったら、後にですけど母がもうその後はぼろぼろ、涙でぼろぼろしながら帰ったんだって、運転して。だからそれが今分かりました。

(宮澤) 最高だよ。

(田中) 言わないというのは。

(宮澤) なかなか、自分が親になってみると、何も言わないというのは難しいもんだね。

(田中) 難しい。

(宮澤) 下手すると、俺、長男坊のサッカーのことなんか、知っていたりすることだと、何言っちゃっているんだ、お前、みたいなことが始まっちゃいそうだけど。何か俺の周りをちょろちょろして

いると、何か相談事があるのとか、ちゃんと考えてから言えよとか。もう俺も何もしゃべらないようにしているし、教えたこともないし。でも面白いな。一生懸命、自分が教わってきたことを伝えようとしているんだよね。その教わってきたことというのは、何も言わないという、聞くだけというものもある。だからサッカーなんかやらなきゃよかったんだよな。

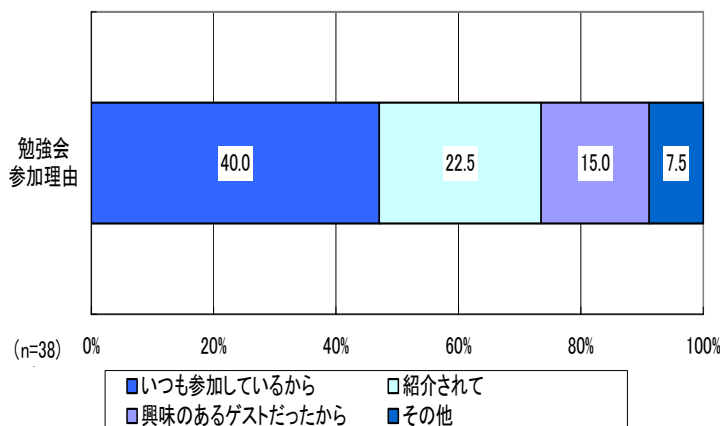
（田中）最後はそこですか。

（重野）まだまだ本当にいろいろお聞きたいんですけども、本日はこの辺で終わりとさせていただきます。お忙しい中、本当にありがとうございました。

2. 第27回 アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会 アンケート集計結果

アンケート総数:38

1. 勉強会参加理由



2. 今回の勉強会で感じたことは何ですか？

- ・心のストレッチをさせていただきました。力が抜けたけど血のめぐりはよくなった。そんな感じです。
- ・「聞く」ことのサポートの大切さ、自分で選ぶことの大切さを改めて実感しました。選手へのサポートで、今一度考え直さないと、と思います。
- ・短い時間の中でキャリアトランジションというテーマはブレていたかもしれないです。メンタル面での気づきはあったので、キーワード、今後のメンタルツールとして持ち帰りたいです。
- ・宮澤さんが、なんて気持ちのよい方なんだろうと思った。「一生懸命」という言葉が好きなのに、暗さなどをまったく見せないすごさを感じた。
- ・宮澤さんは、忙しく人生を生きられていると感じました。
- ・「傾聴」が最大のサポートになりうるということ。
- ・人のサポートの仕方には、いろいろあることがわかった。また、サポートする人間は人の将来を決めてしまう可能性もあることに驚いた。
- ・さまざまな困難を乗り越えられた宮澤さんのパワーに感動しました。
- ・運命に乗っかること、そこで一生懸命もがくこと、そこから自分の運命を自ら得られると思った。
- ・聞いてくれる人がいること(ミシェル氏の場合、母)が大事。親でも社会でも同じかもしれません。自分も聞くことを大事にしていますが、どうしても話してしまう量が多いと思います。
- ・支えてくれる人の大切さ。
- ・最後は、宮澤さんが話した点・・・「母がいたから・・・」。人はすべて社会の一員として生きている。その中で一番大切な「愛し愛される」ということの重要性がにじみ出ていました。
- ・京さんはまだまだ話すチャンスを感じているんだなと感じた。宮澤ミシェルさんの笑いの中に隠された悲しさ、強さと人間味。両親に対する思いの深さ。日本国籍がないが故の悩みと対局する形で存在する家族愛。(一人の人間に必ず与えられている十と一の側面)
- ・非常に楽しく拝聴しました。日本人のアイデンティティしかもっていない自分には想像すらできない人生を歩んで来られたんだなと思いました。ただ、逆境であればある程度、自らのモチベーションを上げることが出来るミシェルさんは、本当のプロフェッショナルなんだなと思いました。さすが解説者だけあって、お話が上手なんだなと感激しました。
- ・宮澤ミシェルさんのお人柄だと思うのですが、楽しくお話が聞けました。雰囲気作りって大事ですね。堅苦しい講演だと、同じ内容でも感じ方、受け止め方がまったく違ってくるので、今日のお話は、スーッと入ってきました。(何気ないですが、キーワードがいっぱいでした。)
- ・宮澤さんに泣かされるとは思いませんでした。
- ・自分の話を聞いてくれる存在がいる、その大切さを強く感じました。
- ・すごいパワーを感じました。私もがんばろうと思いました。
- ・宮澤ミシェルさんの原動力がよくわかった。
- ・前ではなくて、後ろでもなくて、横にいての大切さ。
- ・ただ傍らにいて聴くこと。傾聴の大切さの再認識。

- ・好きなことを続ける、追うことで、日本人仏人の壁を打ち破ってきたことを体験されている。そのため、自分の子供に対しても「好き」を見つけることを重要な point としているのだなと感じました。お父様にずっとなまけ者になるなどと言われていたことをプラスの発想に変えてお話されていましたが、マイナスにとっている部分で、今も引きずっている部分があったら、教えてほしかったです。ほめられたことはあったのかな、と思います。ずっとがんばり続けて、これだけのキャリアだから満足はあると思うけれど。
- ・ミシェルさんの人生から、学ぶべきことが多く感じられました。子供時代の経験〜Jリーグ時代〜引退後まで、自らの選択するという大切さを学びました。
- ・与えることは決していいことばかりではない。
- ・言葉の重要性。「若いときの苦労は、お金を払ってでもしろ」という言葉がありますが、トランジションの耐性と、そして乗り越える力を醸成してきたのかなと感じました。感情の豊かさが、人生を豊かにしているとも感じました。(特に引退後)
- ・キャリアトランジションについて深めることが出来た。
- ・自分とは何者なのか、向き合い続けてきた「人としての芯」を明るさの裏にすごく感じられました。ミッシェルさんのオフ感が楽しかったし、人柄もすごく伝わってきました。若干脱線ぎみでしたが・・・(笑)もう少しまとまりというか一貫性のようなところがあるとよかったです。
- ・話はとても面白かったのですが、話の移り変わるスピードが速すぎてめまぐるしかったです。ただ、宮澤さんの話はすべて根底がつながっていると最後に強く感じました。「進めることで周りが動き出す、環境も制度も変わっていく」「だから待たずに進む」すばらしい言葉だと思いました。
- ・悩みながらもあきらめずにいればいいこともあるし、飛び込んでくる。余裕を持つためにキャパを広げることが、能動的に動く人に幸運が来る。余裕を持って悩むことが大切かと思います。(せっぱつまって悩まない)
- ・現状を考えたいと思ったのですが、ちょっと感じられなかった。
- ・聴くことのコーチングの大切さ。
- ・宮澤氏の明るいキャラクターの裏に、非常に特殊な家庭環境とそれゆえの悩み、コンプレックス、苦労があり、それをサッカー選手および現在の解説者としての成功のための糧とされていることに、人間としてのスケールの大きさ、いい意味でのしびれとさを感じた。そこに感銘を受けた。
- ・ミッシェルさんの人間味に触れられたことが最大の収穫です。
- ・感受性が豊かな人間は、選手としてだけでなく、どんな職業でも肩書きでも魅力的だと思った。
- ・なんだろう？ まだまとまらない。でも何かを感じている！！

3. 今回の勉強会でのまとめを、何かキーワードとしてあらわすとしたら？

- ・「自然体」
- ・「自分で選ぶ」ことが結果を生んだと納得できる方法。大学生のトランジションで、何かアドバイスをしなくてはと思いましたが、やはり、それぞれが納得することがまずは一歩なんだなと思い直しました。
- ・行動に結びつく好きの本質。
- ・コンプレックスは人にエネルギーを与える。待たずに何かに向かっていく。
- ・アイデンティティを探すことで、人生をより楽しく生きることができる。
- ・アイデンティティ、受容する力。
- ・「粹」
- ・「聞くことの大切さ」
- ・何事も好きでいられること。
- ・「感情が豊かであること」「張りつめた中では何も伝わらない」
- ・アイデンティティ、ミッシェル人、何も言わない。
- ・「アイデンティティ」
- ・(アスリートである前に)「人間としてのアイデンティティとは」。「自分自身の選択」
- ・「反骨芯」と「前向き」と「コミカル」。幼い頃からさまざまな障害を乗り越えてこられたと思いますが、そこには上記の3つのキーワードが欠かせなかったと思います。また、最後の、プレーヤーとして携わることが出来なかった場所に、解説者として立ち入ることが出来たという話には感動しました。
- ・「好きなことをがんばってやっていくと道が開けてくる」
- ・進むことによって周りが動き出した。
- ・節目節目で悩むことの大切さ。好きなことの選ぶ大切さ。「聞く」ことの大切さ。
- ・頑張るためのエネルギー・つながり・好きなものに出会うこと。
- ・そのまま生きている。
- ・聞(聴)くこと。
- ・傾聴。苦しんで前に進め、何かが起こる。
- ・待ってないで進め。
- ・「選択」
- ・「たまたま」「運命」
- ・「〇〇人(〇〇国籍)とは」

- ・「明るさ」「親」「アイデンティティ」「対人」「好き」
- ・「笑顔」
- ・アイデンティティについて「対」〇〇(対話、対人など)「自分とは何者なのか」を知る。
- ・「縁」:つながっているということ、そこに戻ってくるということ、たどりつくところは同じということ。
- ・「余裕を持って悩み、逆境を乗り越える」「あきらめなければ乗り越えられる」
- ・子供には自身に決めさせる。
- ・すべての逆境には、成功へのヒントが隠されている。
- ・人生に無駄なものはない。すべて意味がある。
- ・「環境」:自分のおかれている環境をどう捉えるか?家の中と外との国の違い。サッカーをさせてもらっている、したくてやっている。まわりの人々。
- ・とにかく進むこと。
- ・葛藤。競技の実力とは違う、自分でコントロールできないことの中で葛藤する。

4. 今後の勉強会にて取り上げたいこと

- ・次は誰だろう。テーマはなんだろうと考えるのが楽しみなので、特にリクエストはありません。自分の発想にないテーマが出るのがいいですね。
- ・キャリアトランジションのサポート側として選手(現役)に対してどうかかわっていったらいいのかが、より聞けるとうれしいです。
- ・メンタルとレーニング。
- ・選手の引退時の話などもう少し詳しく聞きたい。
- ・この頃忘れられていることですが、スポーツがここまで発展するきっかけとなった教育プログラムとしての導入を絡めての内容を聞きたいです。
- ・アスリートのキャリアトランジションに携わる人間、支援する人間としての理想的なかかわり方とは?
- ・サッカー選手のセカンドキャリアに興味があります。Jリーガーはもちろん、出来れば海外選手のお話を聞いてみたいです。
- ・指導者(特に子供)の方。トップ選手にはなれなかったが、次のキャリアで頂点にいる方。
- ・審判の方について。
- ・若くしてトップになり、早くに引退したアスリートに対しての今後の人生について。
- ・トランジションのとき、~決断のきっかけ。現役でいるうちから次の自分に進むことは難しいので、なぜそう思うようになったのか、次の自分に進むきっかけはどのポイントなのか。
- ・サッカー日本代表など、成功した一流のアスリートはともかく、宮澤氏がかかわっている3部4部リーグレベルの選手は、どのようにモチベーションを維持すべきなのか。選手として上のレベルを目指すべきか、セカンドキャリアを真剣に考えるべきか。がんばって昇格を果たしたとしても、それによって解雇されるアスリートもいる。そういった、言葉は悪いが「2流」の選手のキャリア設計について伺いたい。
- ・引退・選手を辞めたときの脱力感は、何によってエネルギーに変わったか。(考え方、ある人の言葉、、、など)
- ・自分の競技とは違う分野に進んでいる元選手。それまでの積み上げてきたものがどう役立っているのか。または、積み上げてきた世界があるのに、別の分野に進んだのはなぜか。

5. 2008年3月27日勉強会参加者 計41名

次回勉強会スケジュール

第28回勉強会

2008年5月8日(木)18:30~20:00

ゲスト

山本 雅一氏

株式会社スポーツビズ 代表取締役

テーマ

「スポーツマネジメントの立場からみるアスリートのキャリアトランジション」

場所

ミズノエスポーツ

事務局: 株式会社MJコンテス

東京都港区白金台 4-5-7-205

TEL 03-3447-2890 FAX 03-3447-2893

田中ウルヴェ京

ご意見・ご質問などございましたら事務局までお問い合わせください。